

2F7

特15
974

164
126

本
教
拜
辭
記

全

014616-000-7

特15-974

本教拜辭記

津田 常名/著

M27

ABB-1045



本教拜辭記の首に記す

○凡天地間に孕れて植と植動と動る物その形體の大

小美醜を論はず苟にも物と名くべきもの盡産靈

鎔造の御威徳に漏れ天神地祇修成の御仁惠を脱れ

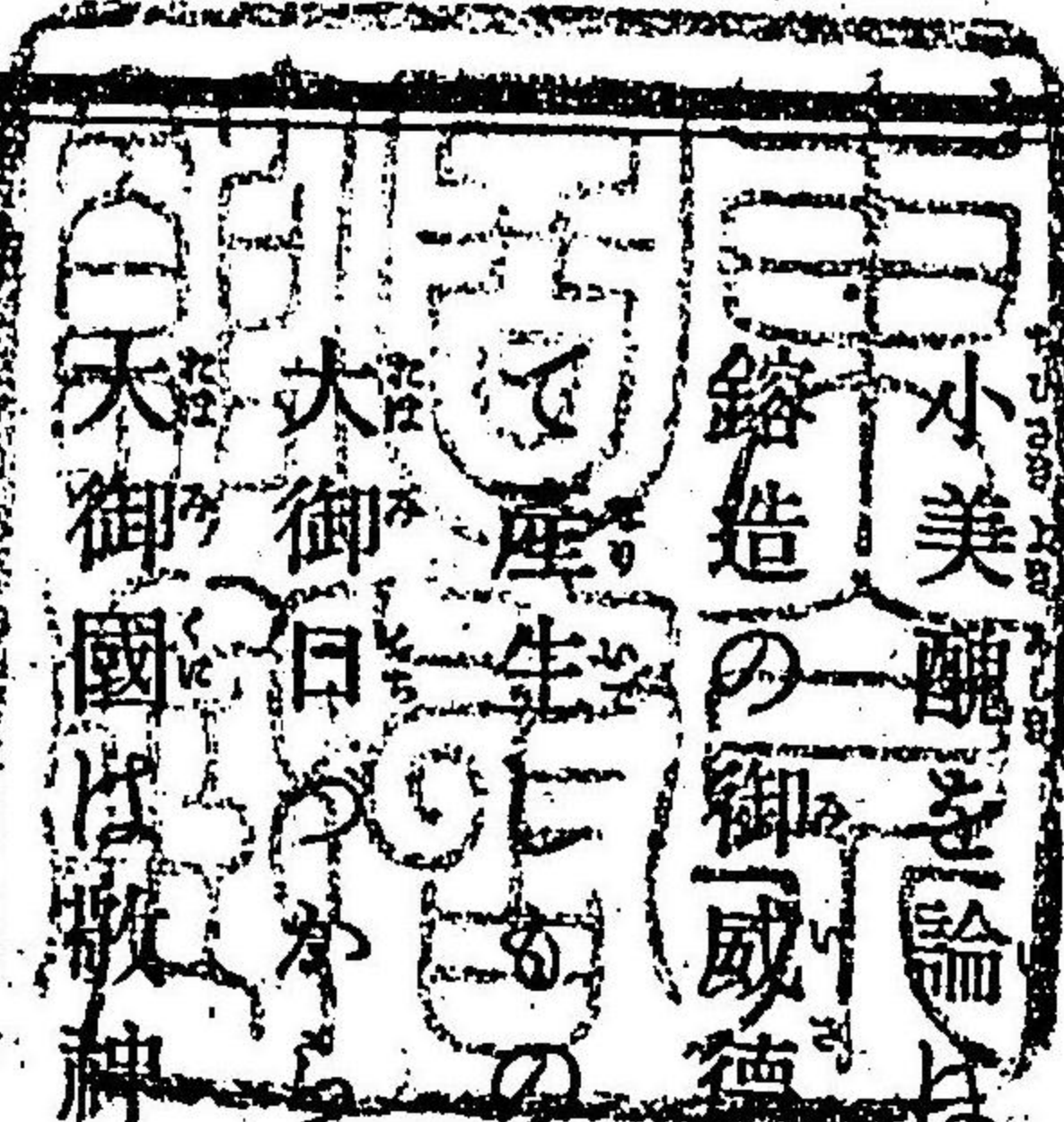
て産生しものは断めて有るべからず故太古神聖の

大御日の御威を傳給ひ遺給ひし本教の本國たる吾皇

天御國は敬神を以て國體の最大要素とせし國にし

て上には天日嗣所知看す天皇の神事を先にし他事

を後にし給ふこと禁闕の御定規なれば歴世祭禮の



大典を忽諸にし給はざるの叡慮いさゝかも變らせ
 給はず天御國に事始めて天津神籬に奉招給ひし産
 靈の五前に大宮能賣神御食津神言代主神等を配享
 らせ給ふ所謂八神殿を始めて大宮中に數多の神を
 齋給ひまた各國に鎮座々す天社國社を洩るゝ事無
 く恒に敬ひ奉仕給ひ下には天下四方の國國の公民
 等が栖息ふ地々に産土神社在り この神社の本縁は拙著産
 土神社考に詳ふり其發刊
 一氏々々に氏神社ありて春秋の祭祀闕ふと
 闕るべし
 と無くかつ各其家内に造化の大元靈を始めて天地

諸神を奉招るべき御座棚を構へて旦暮其御靈を仰
 奉れる習俗なりしを以て彼の日没處の支那印度な
 どいふ國々に發原れる異教の參渡來し後人情のさ
 まゝに遷ろひゆくにも拘らず稚兒を靈足せる庭
 の訓には何よりも先手拍々々と呼びて掌を拍たし
 め神拜の式を教ふるを例とせるは然すがに本教の
 本國たる美風の存れるなりけり
 ○忌服其他汚穢に觸れていまだ心身の清まらざる時
 を除きては平生に朝夕の拜禮を懈怠るべからず又

三大節國祭日などは言も更なり婚姻壽算の嘉禮生誕の佳辰をはじめ其身ろの家に係る祝日には必先産土神社に參詣て其御恩頼を仰奉り祈請奉り家に還りては神棚靈舎などに御酒洗米或は清潔に炊きたる飯品々の御饗を献りて慇懃に拜奉仕り了りて隨意なる直饗の宴を爲すべし

○神代の當昔天地に御徳高き神聖は甚多にして國史家牒に傳はる御事蹟を具に討究ね奉れば神てふ神にその御靈を被らざる神とては殆あらざるなりと

た言詞の美しきは神のふかく感給ふ證多有れば鄙しき俗語異しき外國語などをは大概は混へずて殊に閑雅なる詞を以て其御前毎に既往の神恩を謝し將來の幸福を祈禱奉らまはしきことなれども神官教導職などの嚴格なる祭儀を執行ふ時こそあれ戸々の生計を勤しむ業に暇少き世間に在りて巧にあやなせる長々しき頌辭を千五百万神等に辭別けて白さむとすれば時間のいみじく移れる故に其心專一ならずともすればよまひ言めきて却りて不敬く

聞なざるゝかたも有ぬべければ此册子は如何なる
劇務き身にしも堪らるゝはかりの簡易を主とし拜
禮の間は毫も雜念を發さず其至誠の幽に通えて感
應顯著からしめむとするの意以て作るなり

○神拜には其作法もさまざまの故實ある事なれども
朝夕の拜禮などは普通の式に習ひて先其御前に對
ひ平手を二つ拍ち額を席に突き拜み首を上げて拜
辭を唱へ畢りてまた初の如く拍手一拜すべし但遙拜の時
先天御柱を唱へて平手を一つ拍ち次に圓御柱を唱へて又一つ拍つべしうの他は異なる事無し

○書中宅内の神棚を拜むに比登布多美與云云といひ
産土神社を拜むに大神等と稱ふる等てふ詞など異
しく聞きうくる人もあらむを其は拙著本教神理大
要産土神社考等の書を披閱は疑はしき隈無からむ
ものぞ

明治二十三年四月

年廻舎主人常名識

本教拜辭記

津田常名撰

○每朝早起きて衣服を改め盥嗽はた髪を梳り簀
子俗に稱いに坐し東方に向ひて暫く新鮮の空氣を
呼吸し然て祓所神を拜むべし其詞

高天原に神留坐す神漏岐神漏美の命もちて皇御祖神
伊邪那岐命筑紫の日向の橘小門の檍原に禊祓給ふ時
に生坐せる祓所大神等諸の禍惡罪穢を祓給ひ清給へ
と白す事の由を天神國神八百萬神等共に天の斑駒の

耳振立て所聞食せと畏みくくも白す

但毎夕の神拜にも先此詞を祓所神に白すべし

○産土神社遙拜の辞

此邑の某地地名或は山名に宮柱太知立高天原に千木高知て稱辞竟奉る産須名神社を畏々も遙に拜奉る

○各國に鎮坐す天社國社の中に其家其身または

其職業などに縁故ありて殊更に御靈を信奉れる神社を遙に拜む詞

某國某郡某神社假令は大和國添上郡春日神社攝津國住吉郡住吉神社などの類また伊勢神宮を始め宮殿あるは某宮と稱ふべし

鎮座坐す某神二座以上を祭れる神社あらむには其神號を並舉ぐる事言を俟たす又御名を擧げずして單に大神皇神など稱ふるも可し座敷多ければ大神等皇神等など等てふ辞を副ふべしの大前を畏みくくも遙に拜奉る

○鎮守祠を拜む辭

我家の近き守護神と齋ひ奉る此の御前を拜み奉りて常も信賴奉る高き御徳を幸へ給へと畏み々々も白す

○祖先の墳墓を遙に拜む辭

此邑他國ならば某國某郡某村と稱へ國內他郡ふらば此國の某郡某村と白すべしの某地地名或は山名に齋奉る遠祖代々の祖等親族等諸の奥都城を畏みくくも遙

に拜奉る

○宅内の神棚を拜む詞

此の御座棚に招奉り令座奉る神産靈高皇産靈玉留産
 靈生産靈足産靈五處の五處の神號を略して單に産靈のさ白さむもあしからず大前を始奉
 り天神地祇八百萬神等諸の大前に畏々も白さく比登
 布多美與伊都牟由那々耶古々能多里と日に異に稱奉
 る御靈威を各分掌座々す御功德の隨相宇豆那比助給
 ひて彌益々に幸へ給ひ子孫の繼々茂し八桑枝の立榮
 えしめ給へと畏み々々も白す

○竈神を拜む詞

竈神の御座棚を別に設けたる家にては其御前に白すべき詞なれば此所に記す

竈神と座す奥津日子神奥津日女神の御前を拜み奉り
 て朝饌夕饌を炊く竈に凶事有らせず守給ひ幸へ給へ
 と畏み々々も白す

○祖先の靈舎を拜む詞

遠祖代々の祖等の御靈親族等の御靈諸の御前に白さ
 く高き尊き御恩頼に因りて爲す産業を彌獎めに獎め
 給ひ家門廣らに子孫の八十連屬御祭善しく奉仕らし
 め給へと畏々も白す

○産土神社に参詣て拜む辭
 此邑の産須名と御名は白して稱言竟奉る皇神等の大
 前を拜み奉りて夜守日守に御靈幸へ守給へと畏々も
 白す

○各神社に参拜の詞

此の神社に鎮座々す皇神の大前を拜み奉りて高き御
 徳を彌益々に幸へ給へと畏々も白す

○祖先の墳墓に参詣て拜む辭

此の奥都城を畏みくくも拜奉る

○三大節國祭日などに産土神社に参詣て拜む詞
 此の産須名神社に鎮座々す大神等の大前に畏々も白
 さく天皇が御代を堅磐に常磐に茂御代に幸へ奉り給
 ひ天下の公民平けく守惠給へと畏々も白す

○同上宅内の神棚を拜む詞

此の神棚に齋奉る産靈の大前を始奉り天神國神八百
 萬神等諸の大前に畏みくくも白さく天皇が御世を堅
 盤に常盤に茂御世に幸へ奉り給ひ天下の公民平けく
 守惠給へと畏みくくも白す

○旅行せむとする時産土神社に参詣て拜む辭
 此邑の産須名と御名は白して稱辭竟奉る大神等の大
 前を拜奉りて畏みくくも白さく今日或は來日の生日の足
 日を祝定めて上途つ旅路の往さ來さ恙む事無く守給
 ひ幸へ給へと畏々も白す

同時に宅内の神棚を拜む辭を始め鎮守祠祖先の
 靈舎などを拜む辭も此に準ふべければ別に記さ
 ず

○旅行報賽の時産土神社に白す辭

此の産須名神社に鎮座々す皇神等の大前に畏々も白
 さく曩に上途ぬる旅路の往さ來さ恙む事無く守給ひ
 し御靈威を憚り辱みて畏みくくも報賽の稱言竟奉ら
 くと白す

同時に宅内の神棚を拜む辭を始め鎮守祠祖先の
 靈舎等を拜む辭も此に準ふべければ別に記さず
 ○宅内の神棚に神饌を献る時申す辭

此の神棚に齋奉る産靈の大前を始め奉り天神地祇八
 百萬神等諸の大前に畏みくくも白さく比登布多美與

伊都牟由那々耶古々能多里と日に異に稱奉る御靈威
 を各分掌座坐す御功德の隨相宇豆那比助給ひも彌益
 益に幸へ給ひ子孫の次々茂じ八桑枝の立榮はしめ給
 ふが故に献る禮代の大御饌を平けく安けく所聞食せ
 と畏み畏みも白す

○竈神同上

竈神と座す奥津日子神奥津日女神の御前に畏々も白
 さく朝饌夕饌を炊ら竈に凶事有らせず守給ひ幸へ給
 ふが故に献る禮代の大御饌を平けく安けく所聞食せ

と畏々も白す

以下何神に献饌する時白さむも普通の拜辞に献る
 禮代の大御饌を云々てふ詞を加ふる例なる事準
 へて知るべければ略す

○大祓詞

此は延喜祝詞式に載せられて六月十二月二季の大祓に
 用ゐ給へる詞なれども志篤からむ人の毎月の尾日は更
 なり毎日の夕拜にも神棚を拜む以前
 に白さむは最實たき事なれば記せり

高天原に神留坐す皇親神漏岐神漏美の命もちて八百
 萬神等を神集々給ひ神議々給ひて我皇御孫命は豊葦
 原の水穗の國を安國と平けく所知食せと事依し奉り

き如此依し奉りし國中に荒振神等をば神問しに問し
 給ひ神掃に掃給ひて語問し盤根樹立草の垣葉をも語
 止めて天の盤座放ち天の八重雲を伊頭の千別に千別
 きて天降し依し奉りき如此依し奉りし四方の國中と
 大倭日高見の國を安國と定奉りて下つ盤根に宮柱太
 敷立高天原に千木高知て皇御孫命の美頭の御舍仕奉
 りて天の御蔭日の御蔭と隠坐て安國と平けく所知食
 さむ國中に成出む天の益人等が過犯けむ雑々の罪事
 は天津罪とは畔放溝埋樋放頻蒔串刺生剝逆剝屎戸許

許太久の罪を天津罪と法別けて國津罪とは生膚斷死
 膚斷白人胡久美已母犯罪已子犯罪母與子犯罪子與母
 犯罪畜犯罪昆虫の災高津神の災高津鳥の災畜仆し疊
 物せる罪許々太久の罪出む如此出は天津宮事以ちて
 大中臣天津金木を本打切り末打斷ちて千座の置座に
 置足はして天津菅曾を本刈斷ち末刈切りて八針に取
 辟きて天津祝詞の太祝詞事を宣れ如此宣らは天津神
 は天の磐門を押披きて天の八重雲を伊頭の千別に千
 別きて所聞食さむ國津神は高山の末短山の末に上坐

て高山の伊穗理短山の伊穗理を撥別けて所聞食さむ
 如此所聞食しては皇御孫命の朝廷を始めて天下四方
 國には罪と云ふ罪はあらじと科戸の風の天の八重雲
 を吹放す事の如く朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹
 拂ふ事の如く大津邊に居る大船を舳解放ち艦解放ち
 て大海原に押放す事の如く彼方の繁木が本を焼鎌の
 敏鎌もちて打掃ふ事の如く遺罪は有らじと祓給ひ清
 給ふ事を高山の末短山の末より佐久那太理に落多藝
 都速川の瀬に坐す瀬織津比咩と云ふ神大海原に持出

なむ如此持出往なは荒鹽の鹽の八百道の八鹽道の鹽
 の八百會に座す速開都比咩と云ふ神持可々呑みてむ
 如此可々呑みては氣吹戸に坐す氣吹戸主と云ふ神根
 國底の國に氣吹放ちてむ如此氣吹放ちては根國底の
 國に坐す速佐須良比咩と云ふ神持佐須良比失ひてむ
 如此失ひては天皇が朝廷に仕奉る官々の人等を始め
 て天下四方には今日より始めて罪と云ふ罪は有らじ
 と祓給ひ清給ふ事を諸所聞食せと宣る

○畧拜辭

此は幼童等のいまだ記慮乏しきものに用ゐしめ或は時
 間を限りて務むべき業ある人の止むを得ざる際ふごに

此の大前用うべし以下之に準へを拜み奉りて御靈助けて幸へ給へと畏み畏みも白す

○同上

此の御前を畏々も拜奉る

○祓所神同上

祓所神等祓給ひ清給へと畏々も拜奉る

○献饌同上

此の大前に献る物等を平けく安けく所聞食し幸給へ

と畏み々も白す

○頌徳詞

この詞は造化の神徳を頌賛する上代の美詞なる事拙著産土神社考に記載せる如くなれば朝夕禮拜の時毎に幾

回もくり返して唱ふべし

比登布多美與伊都牟由那々耶古々能多理耶

年廼舍先生著述書目

門人

松野一郎
金子友三郎

等記

從三位子爵福羽美靜君序

本教神理大要 既刊 全

和製美本 定價郵稅共貳拾五錢

造化の關鍵を穿ち幽妙の神理を闡明せられたる古人未發の高論卓説あり一回此書を繙けば世界無比の寶典たる我日本帝國太古史の眞價を識るに餘あり

産土神社考 近刊 全

魂論 未刊 三册

祝詞作文自在 全 二册

葬家必用 未刊 全

伊豆志神社考 全 全

商工祖神略記 全 全

天則百首 全 全

鎔造天則圖說 全 壹枚

五十連音神理圖 全 全

太占神理圖 全 全

明治廿七年一月十五日印刷
全 年二月五日發行

定價金五錢

山口縣阿武郡須佐村四百八十八番地

著述者兼 發行 者 津 田 常 名

東京市京橋區山城町八番地

印刷者 多 田 三 彌

東京市京橋區山城町八番地

印刷所 惠 愛 堂

